



Title	連環画の中の雪男2 : 雪男版スパイ大作戦
Author(s)	中根, 研一
Citation	連環画研究, 4, 107-117
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98417
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98417
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_107-117.pdf



連環画の中の雪男2

——雪男版スパイ大作戦——

中根 研一

SはソビエトのS

今回取り上げる連環画は、張萍文・韓植墨絵『雪男の秘密（原題：雪人的秘密）』（山西人民出版社、1982年）である【図版1】。

表紙をめくった扉の部分には「科学幻想故事」とあるが、単なる子供向けSFというよりも、殺人事件をめぐる謎解きや、国家間のスパイ合戦の要素も盛り込まれ、当時の時代背景を色濃く反映したなかなかシリアスな展開もある。

本書冒頭に「内容要約」が掲載されているので、まずはそのまま引用しよう。

雪男の秘密を解明するため、我が国の科学者は変装をして、勇敢にも雪男の群れに潜入する。調査活動が順調に進んでいたまさにその時、普通ではない様子の「雪男」〈アイチー〉に遭遇、我々が科学者は危うく彼に殺されかけた。度重なる格闘の末、〈アイチー〉の正体が暴かれると——その偽装した雪男は、S国が我が国の国防機密を盗むべく企んで派遣したスパイだった。激しいバトルを経て、スパイの〈アイチー〉はついに捕らえられ、雪男の調査活動も人々を満足させる成果を得たのであった。¹

この時期、中国の小説や連環画などフィクションの世界で描かれる雪男や〈野人〉の物語は、たいてい中国の科学力の勝利のうちに大団円で終わるのが常²だが、本作ではそこへ、ライバルとなる他国の存在（そして、それに対する中国の優位）が描かれているのがミソである。

本文中では「S国」とイニシャルで書かれているが、これは明らかに当時のソビエト連邦を指していると考えてよいだろう。

「S」は「Soviet」の頭文字だから……という単純な理由だけではない（ちなみに中国語でソ連



図版 1

を指す単語「苏联」のピンイン表記「Sūlián」の頭文字も「S」だ）。

ヒマラヤの雪男が騒がれ始めた 1951 年³以降、早い時期からこの未知の類人猿と思われる未確認動物に対して国家をあげて研究を進めていたのは、まさにソ連だったのである。1970 年代後半に中国の神農架の〈野人〉騒動の際、調査隊の隊長を務めた杜永林は著書の中で、「世界中で、国家の支援のもと〈野人〉（雪男）について調査が進められたのは、中国と旧ソ連だけだった」⁴と述懐している。少なくとも、当時の〈野人〉調査関係者の中に、旧ソ連の研究を強く意識していた者がいたのは確かである。

中国科学院が〈野人〉調査に乗り出したように、旧ソ連でヒマラヤの雪男研究に熱心だったのは、ソ連科学アカデミーである。1959 年には、同アカデミーが出す 3 つの雑誌『ソビエト民族誌』（第 4 号）、『自然』（第 10 号）、『現代の東方』（第 8・9 号）が、ほぼ同時にそれぞれ雪男問題に対する論考を発表している⁵。また、当時の全ロシア自然保護協会には「“雪男”問題特別研究委員会」⁶が設置されていた。科学者たちの本気度が窺える。

そして肝心なのは、この時期、中ソが対立状態にあったということである。1956 年のフルシチョフによるスターリン批判以後、中国はそれまでのソ連モデルから脱却し、「大躍進」などの独自路線を歩み始め、反ソ傾向を強めていくことになる。そして、ちょうどソ連科学アカデミーから上記の雪男論文が発表された 1959 年、中国への核技術供与を含む「国防新技術に関する協定」を旧ソ連側が一方的に破棄し、中ソの亀裂が決定的となっている。その後、中国は 1964 年に原爆実験を、1967 年に水爆実験を独自に成功させている。そして、1970 年代にはアメリカはじめ西側諸国との関係正常化をはかっていくことになる。

そのような中、1976 年には中国科学院による〈野人〉調査隊が組織されているが、そこにはヒマラヤの雪男研究の最前線を走っていた旧ソ連の科学者たちへの対抗心が見え隠れするのだ⁷。

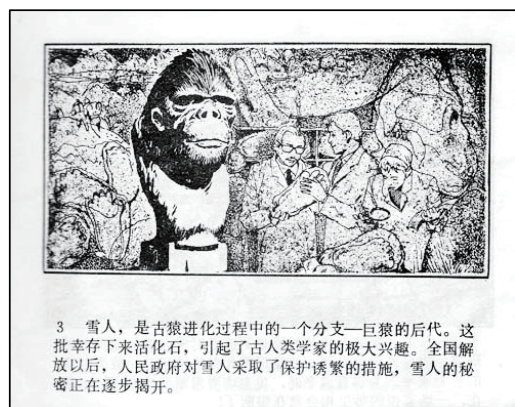
それは、連環画『雪男の秘密』にも色濃くにじみ出ている。

では次に、本作における雪男の描写に注目しながら、やや詳しくストーリーを追っていきましょう。

潜入捜査「雪男つくろう」作戦

3 コマ目【図版 2】では、まず雪男についての説明が、以下のようにされている。

雪男は、古代猿人が進化過程で分かれた——ギガントピテクス巨猿の子孫である。幸運にも残っていたこれらの生きた化石は、古人類学者の大きな興味を引いた。全国が解放されてから、人民政府は雪男に対して保護と繁殖の措置をとり、雪男の秘密は



図版 2

次第に解明されつつあった。⁸

この記述からわかる通り、この物語世界における中国は、すでに雪男を発見しており、ある程度生態についても研究を進めているということがわかる。

ここに描かれる雪男は、全編を通して頭頂部が鋭角的で、実際に世界中に浸透した雪男のイメージに沿っている。

主人公である若き科学者の林は、雪男研究の第一人者で恩師である何教授を手伝うため、ヒマラヤの山中の国境付近へ赴くところから、物語は始まっている。9コマ目【図版3】で、林は、

あまり雪男に興味のなさそうな軍人・梁小隊長に向かって「科学のために、人は自分たちの祖先を理解するべきです！」⁹と説明している。ここからも、やはり雪男は人類のルーツを知る上で重要な鍵を握る存在として描かれていることがわかる¹⁰。

直後、林の恩師である何教授が、雪上で他殺体となって発見される。周囲には雪男らしき足跡。悲嘆に暮れながらも、教授の遺志を継いで雪男研究を続けることを誓う林なのであった。

ひとり雪山で調査を開始した林は、雪男の群れと遭遇し、スキーで逃走を図る。最後まで林を追いかけてきた一頭は、助けにきた梁小隊長の銃弾に倒れた。

林は、教授が死守したメモ帳に残された謎の暗号を解読し、それが雪男の言語¹¹を記録したものだったと気づくのだった。

——そこで林は、ある作戦を思いつく。

それは、射殺した雪男の毛皮をまとい¹²、何教授のメモを研究して習得した雪男言語を話すことで、自ら群れの中へ実地調査に入ろうというものであった【図版4】。雪男たちを至近距離から研究できれば、これ以上ない収穫が得られるのは間違いないというワケだ。

果たして林は、その死んだ雪男になりすまし、雪男の集団に潜入することに成功する。言葉も習得し、怪しまれることもなかった。こうして普段は群れとともに行動し、たまに抜け出しては食事や研究に勤しむのであった。雪山の屋外活動でも、毛皮にくるまれている



図版 3



図版 4

から「少しも寒くないわ」というワケである。

しかしある晩、寝ている雪男たちを調べていた林に、〈アイチー〉という名の雪男が襲いかかる。叫ぶと手を放したので事無きを得たが、この〈アイチー〉は群れの中でも飛び抜けて知能が高いことが判明する。

その後、この事件を梁小隊長に相談すると、その〈アイチー〉はスパイが変装している可能性があると言われる。最近、試験場（雪男の研究施設か？ 詳細は不明）で実験サンプルの盗難が相次いでいるのも、その仕業ではないかというのだ。

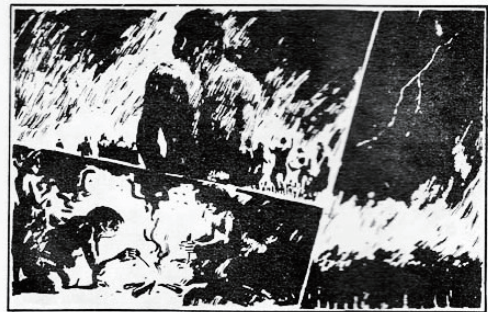
その正体を確かめるべく、ある日、草原にいた雪男たちの周囲に火を放ち、その反応を観察すると、〈アイチー〉が桶で川の水を汲み、消火活動を始めた【図版 5】。そこで初めて、〈アイチー〉が人間であると確信する林たち。「水が火に勝つ（水火相克）というのは、人類数万年の実践によって獲得した知識であり、雪男が知っているはずがないから」というのがその理由だ。

と、その次のコマでは唐突に、ふたりのヒゲの男性がグラスの酒を酌み交わしながら、何やら密談をするシーン【図版 6】が挿入され、以下のように説明されるのである。

真相はすっかり判明した。もともとS国は、我々のガラウェイ試験場の情報を盗むためにかねてより知恵を絞っていたが、目的を果たせずにおり、そこで〈アイチー〉というスパイを送り込んだ。彼らは、我が国が雪男を保護している点を利用し、変装して国境内に潜入し機密を盗んでいたのである。老教授が殺害されたのは、スパイの疑惑を引き起こしたためだった。¹³

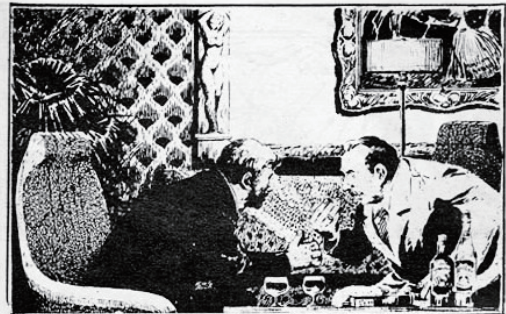
どうしてS国だとわかったのか？ それに対する明確な証拠は示されないが、ヒマラヤ山脈へ続く中央アジアで中国と国境を接し、なおかつ対立する国といえばソ連しかない……というのは、当時であってごく自然な発想だったとはいえよう。

前述のように、この作品世界における中国は、すでに雪男を発見し、保護・繁殖をおこなっており、雪男研究の分野においてもはやS国の科学力を凌駕しているかに見



56 在事实面前，我不得不承认梁排长的意见是对的：“艾契”看来是人而不是猿。因为水火相克是人类几万年实践才获得的认识，雪人是不可能知道的。

図版 5



57 真相大白了。原来，S国为了窃取我们喝拉维试验场的情报曾费尽心机，但没有得逞，于是便派出“艾契”这个间谍。他们利用了我国保护雪人这一点，化装潜入国境内窃密。老教授被害就是因为引起了间谍的怀疑。

図版 6

える。しかし、S国のスパイも雪男語をマスターして潜入調査に入っているのだから、なかなかのものである。

相手がスパイとわかれば逮捕しなければならない。そこで林や梁小隊長がとった作戦とは？

ワナと雪男の情報

すぐに捕まえようとする林を制し、梁小隊長は敵を誘き出す作戦を考案。試験場でニセの実験を行ない、つられて調査に出てきたところを捕まえようというもの。

林は引き続き雪男の扮装をして、敵の動向を探ることにした。

果たして試験場の動きにつられて、群れから出てきた〈アイチー〉。それをスキーで追いかける林（イン・ザ・雪男）【図版 7】。文明の利器を乗りこなす毛むくじゃらの雪男は、なかなか新鮮なビジュアルである。本文中でも、原始の象徴である毛むくじゃらの雪男が、現代の最先端のスキーを乗りこなしていることについて触れ、そのコントラストの妙を強調している。

スキーで疾走を続け、もう少しで試験場というところで感づかれ、〈アイチー〉に銃を向けられる【図版 8】。なんとこの〈アイチー〉＝S国のスパイは、ぎこちないながらも中国語も話せるようで、「不许动（動くな）！」と叫ぶ。

隙を突いてスキー板で銃を払い落とし、肉弾戦に持ち込む林。かくして、雪上の着ぐるみレスリング・バトルが勃発する。格闘術の心得がないと自覚する林は、ひたすら相手の背後に組み付き、頭を隠すようにして敵に攻撃の手を出させない作戦に出る【図版 9】。実



図版 7



71 事情明朗化了。
“艾契”用生硬的中国话喊了声：“不许动！”乌黑的枪口对准了我。我有点慌：梁排长他们埋伏在试验场，怎么能料想到我们遭遇在这里呢？



73 论搏斗，我根本不是这个训练有素的间谍的对手，所以我只能用尽全身力气死抱着他的后腰。把脑袋藏在他的脊梁后，使他空有格斗技术用不上。

図版 8

図版 9

に賢い戦法だ。

膠着状態が続く中、〈アイチー〉の残した雪上の足跡を追って、ほかの雪男たちが集まってきた。彼らをけしかけて林を襲わせようとする〈アイチー〉。危うし！ 林！

と、林はとっさに〈アイチー〉を突き放すと、スキー板を彼のそばへ放り投げ、さらに相手の首にある毛皮の継ぎ目を引きちぎって、その本当の顔を露出させてしまう【図版10】。雪男たちは何千年もの歴史の中で、スキー板を履いた人間との戦いを経験しているため、条件反射的にスキーヤーを襲うだろうと、林は推理していたのだ。

果たして襲われたのは、「覆面を剥がされたマスクマン」よろしく、ありのままの姿を見せた〈アイチー〉の方だった。

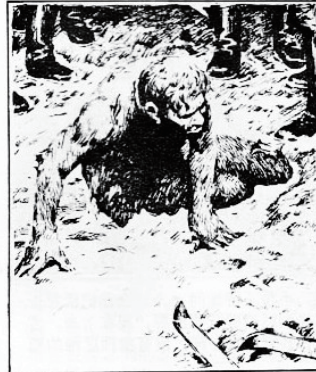
雪男軍団に集団リンチに遭う〈アイチー〉人間体。生きたまま身柄を押さえない林は、銃を拾い上げて威嚇発砲し、雪男軍団を追い払う。かくして〈アイチー〉は逮捕されるが、その容貌は「黄色い目で、巻き髪のスパイ」¹⁴と形容されている【図版11】。この表現も、S国人の特徴を端的に表しているだろう。

かくして捕虜を無事に送り届け、事件は解決したのであった。



79 就在这生死攸关的瞬间，我猛地放开“艾契”，死命脱下滑雪板扔在“艾契”身旁，又伸手在艾契颈部雪人皮毛的接口处一掀，“艾契”的真面目暴露出来了。雪人们立即把视线转向他，高喊着扑上去。

図版 10



81 梁排长他们听到枪声，驾驶着两辆汽垫车火速赶来，用枪声赶跑了雪人群，那个黄眼睛、卷头发的间谍“艾契”终于落网了。

図版 11

ソ連製「毛人水怪」の恐怖の記憶

以上見てきたように、本作は雪男に化けて騙しあうという、スパイ・アクション物である。

荒唐無稽といってしまうえばそれまでだが、この「人間である敵が雪男に化ける」という言説は、実は現実世界の不安を象徴したものと見ることもできる。当時の中国人の中に長年にわたって植えつけられた恐怖の記憶が、そこにはあったのかもしれない。

中華人民共和国成立直後の1950年代に、人々を恐怖に陥れた「毛人水怪」¹⁵の風説が流布したことがあった。その姿形には諸説あるものの、とにかく得体の知れない怪物が、人々を襲い、身体部位を損壊するというものだ。しかも、多くの噂ではその「毛人水怪」は、中国共産党政府が訓練して田舎へ派遣し、婦女の乳房・胎児や男性の生殖器・眼球などを

えぐり取り、ソ連へ送って「原子爆弾の材料」にしようとしていると語られるものが多い。およそ信じられない話ではあるが、疑心暗鬼に駆られた人々による暴動や傷害事件なども実際に発生しているようである。とにかく、同時代の田舎の人々にとって、ある程度リアリティのある恐怖であったと見ることができる¹⁶。

注意したいのは、これらの風説の背後に潜む「ソ連の存在」である。

たとえば江蘇省で採取された話では、えぐり取った身体部位はソ連へ運ばれるとされ、安徽省無為県の話でも、「毛人水怪」暗躍の陰にはソ連と中国共産党政府との密約があったと語られている。さらに、安徽省五河県のケースではその怪物（ここでは「水鬼毛人」と呼称される）は、そもそもソ連で訓練されて派遣されてくるものとまで語られている。しかも、昼間は共産党員の姿だが夜になると恐ろしい姿に変身するとも噂された。

これらは、共産党政府をよく思わない「反動分子」が意図的に流したとの説もある。時はまさに中ソが蜜月時代の風説であり、ソ連に原子爆弾の技術協力を請うという当時の中国政府の方針が投影されたものであろう。しかし前述の通り、その後の中国はむしろ反ソ傾向を強めていく。

また、1970年代半ばから始まる神農架の〈野人〉騒動の際にも、当初、〈野人〉とは「怪物に化けた階級敵が闘争をしかけている」とする見方があった事例も確認できる¹⁷。

「毛人水怪」の背後に見え隠れしていたソ連への恐怖の記憶が、1970年代以降に未確認動物〈野人〉イメージ（中国の科学力で持つて解明すべき存在）と結びつき、さらにヒマラヤの国境地帯に出没する「雪男に化けたS国スパイ」として現れたのが、この連環画『雪男の秘密』だったのではないだろうか。

それを考える上で、重要な場面が本作にはある。

物語序盤、何教授が雪上で何者かに殺害されたシーンだ【図版 12】。イラストでは教授の頭部は見せず、主に下半身と、雪上に残る足跡だけを描いているが、その現場については以下のように記述されている。



13 眼前是一片惨不忍睹的景象：雪地上布满凌乱的雪人足迹，何教授僵硬地卧在一片殷红的冻结的血泊里，衣服被撕成碎条，颜面和手都被雪人撕咬得血肉模糊，脚上还穿着他用来跟踪雪人的汽动滑雪板。

図版 12

眼前には見るに耐えない惨たらしい光景があった。雪上に雑然と踏み荒らされた雪男の足跡があり、何教授は、どす黒く凍った血の海の中に硬直して横たわっていた。衣服は引き裂かれてバラバラになり、顔面と手はいずれも雪男によって咬みちぎられて血だるまとなっており、足にはまだ、彼が雪男を追いかけるのに使用した自動スキー板を履いていた。¹⁸

全編を通じて、ほとんど唯一といってもよい陰惨な描写がここにはある。イラストには描かれないが、相当な身体損壊があったものと想像される。

ここにかつての「毛人水怪」の恐怖の記憶（身体部位を怪物に化けたソ連側の人間に持ち去られる）を読み取ることは、それほど難しいことでもないだろう。

＊

2011年秋、ロシアのケメロボ州で、七カ国の研究者が集まって雪男の調査と国際会議が開かれた¹⁹。その中には、中国からの研究者の姿もあったとのことで、私はいささか感慨深い思いでそのニュースに接したのであった。

雪男バトルをめぐる余談あれこれ

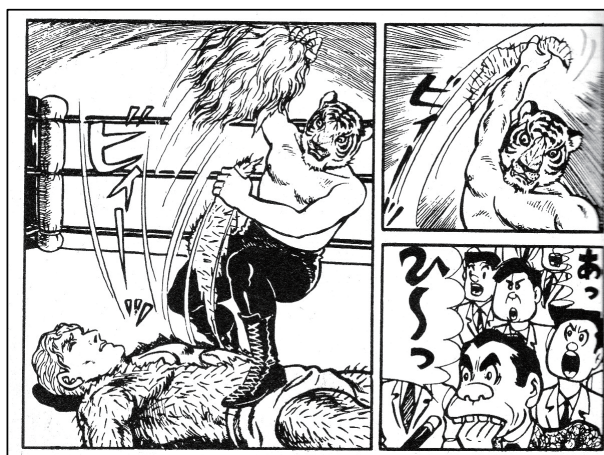
本稿を書くに当たって、様々な方から本当に貴重なご意見をたくさん賜った。その中で、雪男との格闘にプロレスの影響もあるのではないかと、という興味深いご指摘をいただいたので、それへの回答になるかどうかはわからないが、少しでも考察（空想?）をしてみた。

当時にあつては西洋式のプロレス興行は中国でほとんど知られておらず、この連環画への直接的な影響はないと考えている。しかし、雪男に化けたふたりのレスリング然としたバックの取りあいや、最終的に覆面を剥ぐなどの描写に、どこかしらプロレス的な臭いが漂うのも事実である。

実は、日本で1968年から1971年にわたって少年漫画誌に連載され、爆発的ヒットとなった、梶原一騎原作の『タイガーマスク』に、獣人チックなマスクマンが2名登場している。可能性は決して高くはないが、あるいは何らかのルートでこの作品が、『雪人の秘密』の作者のもとにあつたとしたら……と夢想するのも楽しいではないか（その確認をすることはきわめて難しいので、あくまで空想ではあるが）。

ひとりは、覆面ワールド・リーグ戦に参戦したドラキュラである。正体は白人男性であるが、凶器である針状の毛がビッシリ生えた全身スーツを着用し、タイガーを苦しめるが倒され、覆面ごとニセの皮膚が剥がされる【図版13】²⁰。

もうひとりは、インドで開催された全アジアプロレス王座決定戦に参戦したスノー・シンだ。こちらは最初スキンヘッドでツルツルの肌で現れるが、試合が



図版 13

長期化するに連れて、長い毛が生えてきて、本来の獣人に戻ってしまうという、正真正銘

の雪男として描かれている（劇中、正体は曖昧なまま終わるが……）【図版 14】²¹。

つまり、作品中でタイガーマスクは、ニセ者と本物、ふたりの獣人と闘っており、それぞれ迫力あるプロレスシーンが、いわゆる「劇画スタイル」で描かれているのである。同じく写実的で劇画調の『雪人的秘密』におけるバトルの場面は、共通するものも多い。

ところで、こちらはプロレスではなく実在の英雄（武術家）黄飛鴻を主人

公にした武侠物なのだが、香港映画『黄飛鴻大戦猩猩王』（1960）には、村娘をさらったり強盗をはたらいたりする「大猩猩」が登場する。頻繁に出現しては人々を戦慄させる「大猩猩」だが、実際にはニセの毛皮をかぶった人間の悪党【図版 15】たちの仕業であった……という話だ。しかし、そこへ本物の怪獣「大猩猩」が現れて街を襲撃【図版 16】。人々との一大バトルを繰り広げた後、最終的に黄飛鴻の正義の刃の前に退治されるという落ちであるが、悪党が扮したニセの獣人と本物の獣人の登場（そしてバトル）というモチーフは、『雪人的秘密』に通じるものがある。



図版 14



図版 15



図版 16

もちろん、この映画が連環画に何らかの影響を与えたと言うつもりはないが、「毛人水怪」のケースといい、彼らの中に「悪党は獣人の毛皮をかぶって悪さをする」という共通のイメージ²²があることは、非常に興味深いと思う次第である。

- ¹ 原文は以下の通り。「为了弄清雪人的秘密，我国科学家经过化装，勇敢地打入雪人的群。正当考察工作顺利进行时，却遇到一个超乎寻常的“雪人”艾契，我科学家险些被它杀害。在反复的较量之后，艾契的面目暴露了这个伪装的雪人，原来是 S 国派来企图窃取我国防机密的间谍。经过激烈的搏斗，间谍艾契终于落网，对雪人的考察工作也取得了令人满意的结果」。
- ² 前号の拙稿「連環画の中の雪男——ふたつの『雪山魔笛』——」（『連環画研究』第 3 号、連環画研究会、2014 年 3 月）参照。
- ³ イギリスの探検家エリック・シプトンが、雪上に残る謎の足跡を撮影し、それが全世界に広まった。前掲拙稿「連環画の中の雪男——ふたつの『雪山魔笛』——」参照。
- ⁴ 杜永林『野人——来自神农架的报告』（中国三峡出版社、1995 年）240—241 頁。原文は以下の通り。「在世界上，由国家支持对“野人”（雪人）进行考察的，只有中国和原苏联」。
- ⁵ B・ポルシネフ論文「“雪男”論争」（ソビエトの科学雑誌『知識は力』1960 年 2 月号所収。邦訳は袋一兵訳で山岳雑誌『岳人』1960 年 6～8 月号所収）にその詳細が記されている。
- ⁶ 同委員会議長は、前出の B・ポルシネフ。
- ⁷ この問題については、拙稿「怪獣とプロパガンダ——中国“野人”をめぐる言説に潜む政治と科学——」（『饕餮』第 11 号、中国語学会、2003 年 10 月）で考察を試みている。
- ⁸ 原文は以下の通り。「雪人，是古猿进化过程中的一个分支——巨猿的后代。这批幸存下来活化石，引起了古人类学家的极大兴趣。全国解放以后，人民政府对雪人采取了保护诱繁的措施，雪人的秘密正在逐步揭开。」。
- ⁹ 原文は以下の通り。「为了科学，人应当了解自己的祖宗！」。
- ¹⁰ 雪男を人類進化の鍵を握る「ミッシングリンク」として描くのは、当時の中国ではよく見られた。前掲拙稿「連環画の中の雪男——ふたつの『雪山魔笛』——」参照。
- ¹¹ 作品中、何種類かの具体的な雪男言語が登場する。「食べ物」を指す単語は「アシ（啊西）」で、攻撃するようけしかける言葉が「ウワールー！（呜哇ー魯！）」といった具合である。何かの法則性（暗号性）が見出せれば面白いのだが、今のところよくわからない。〈野人〉をテーマにした現代の小説などでも、〈野人〉言語を扱った作品があり、今後機会があれば改めて考察してみたい。
- ¹² この作戦は荒唐無稽にも思えるが、儀礼的に獣の毛皮をまとうことで自分たちとは異なる他者との交信を試みることは、古今東西様々な例があり、決して珍しいことではないだろう。たとえば最近では、ヨーロッパ 19 カ国の獣人仮装写真を豊富に収録したシャルル・フレジュ『ワイルドマン 欧州の獣人——仮装する原始の名残』（青幻社、2013、原著は Charles Fréger “*The Wild Man and the tradition of mask in Europe & Description of characters and groups*”, Musée international du Carnaval et du Masque, Binche, Belgium, 2012）などで、バラエティに富んだ西洋の獣人仮装を見ることができる。また、クーンブ地方のシェルパ族の祭礼ドゥムヂェでは、道化役の「ギャマカカ」が、普段は寺院に安置されているイエティ（雪男）の頭皮とされるものを実際にかぶり、顔に墨を塗り、悪ふざけをするという余興がある。根深誠『イエティ——ヒマラヤ最後の謎“雪男”の真実——』（山と溪谷社、2012）参照。
- ¹³ 原文は以下の通り。「真相大白了。原来，S 国为了窃取我们噶拉维试验场的情报曾费尽心机，但没有得逞，于是便派出“艾契”这个间谍。他们利用了我国保护雪人这一点，化装潜入国境内窃密。老教授被害就是因为引起了间谍的怀疑。」。
- ¹⁴ 原文は以下の通り。「那个黄眼睛，卷头发的间谍」。
- ¹⁵ 詳細は、李若建『虚実之間——二〇世紀五〇年代中国大陸謠言研究』（社会科学文献出版社、2011）、武田雅哉「〈魑魅魍魎〉から〈毛人水怪〉へ——中国は戦慄にことかかぬ」（『HUMAN』vol.6「特集 日本の魑魅魍魎」、2014 年 6 月、所収）を参照。なお、拙稿

「1950年代中国の一大風説事件「毛人水怪」——“野人”騒動前夜の中国に広がった怪獣物語——」（『鸞鸞』第15号、中国文学学会、2007年9月）では、「毛人水怪」と神農架の〈野人〉騒動との関連で考察している。

¹⁶ たとえば漫画家の何富成が幼年時代を回想して描いた画集『虫虫的尖叫——何富成漫画童年』（寧夏人民出版社、2006）の中には、「毛野人」の話を書いて恐怖する子供たちの場面がある。武田雅哉氏は前掲「〈魑魅魍魎〉から〈毛人水怪〉へ——中国は戦慄にこたかぬ」において、この「毛野人」を「毛人水怪」とする説をとっているが、時代的に神農架の〈野人〉騒動が本格化し、世間にその噂が流布する1970年代なかば以前の体験であり、私もその可能性は高いと考える。「毛人水怪」にまつわる同時代に言及された記録については、今後少しずつ拾い上げていきたい。何富成の当該イラストについては、本誌前号掲載の加部勇一郎「内なる小さきもの——自らの「童年」を描いた作品を中心に」（『連環画研究』第3号、連環画研究会、2014年3月）もあわせて参照されたい。

¹⁷ 前掲拙稿「1950年代中国の一大風説事件「毛人水怪」——“野人”騒動前夜の中国に広がった怪獣物語——」参照。神農架の〈野人〉騒動以後に採集された過去の目撃談では、怪物を「毛人」と呼称するものも多く、あるいは1950年代の「毛人水怪」の記憶も残存していた可能性もある。

¹⁸ 原文は以下の通り。「眼前是一片惨不忍睹的景象：雪地上布满凌乱的雪人足迹，何教授僵硬地卧在一片殷红的冻结的血泊里，衣服被撕成碎条，颜面和手都被雪人撕咬得血肉模糊，脚上还穿着他用来跟踪雪人的汽动滑雪板。」

¹⁹ 「イエティをさがせ 7カ国の研究者が捜索隊 西シベリア」（『朝日新聞デジタル』2011年10月3日記事、URL: <http://www.asahi.com/special/playback/TKY201110030084.html> 最終確認日2014年12月1日）。

²⁰ 図版は『完全復刻版 タイガーマスク』第3巻（講談社コミックス、1994）より。

²¹ 図版は『完全復刻版 タイガーマスク』第5巻（講談社コミックス、1994）より。

²² 馬徐維邦のサイレント映画『怪奇猿男』（原題『空谷猿声』、1930）にも、若い女性をさらうゴリラが登場するが、その正体は女性の肉体を使って不老不死の薬を作ろうとするマッド・サイエンティストが扮装したものであった。アメリカの『キング・コング』（1933）よりも早い時期のゴリラ怪獣映画として、興味深い作品のひとつ。この映画、筆者は未見であるが、詳細は武田雅哉・林久之『中国科学幻想文学館・上』（大修館書店あじあブックス、2001）を参照。